

気心の知れた幼なじみと、ひとつ屋根の下 ―上京先で偶然はじまった、同い年のふたり暮らし―

なんでも言い合える同い年の幼なじみと、いつのまにか恋
になっていく同居純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

子どもの頃から、倉田成美くらたなるみのことなら、たいてい何でも知っているつもりだった。

拗ねたときの口の尖らせ方も、嘘をつくときに目が泳ぐ癖も、笑い上戸で、それでいて泣き虫なところも。同い年の幼なじみとして、十何年も隣にいたのだから、当然だと思っていた。

——その成美が今、俺の腕の中で、聞いたこともない声を漏らしている。

夜のリビングはとうに静まって、カーテンの隙間から、向かいのマンションの灯りがひとつ、ふたつ、にじんできた。二人で借りているこの部屋の、いちばん奥。昼間はあれだけよく回る成美の口が、今は言葉にならない息だけを、切れぎれにこぼしている。

瀬戸蓮せとれんは、間近にある成美の顔を見下ろした。いつも無造作に結んでいる栗色の髪が、今はほどけて、白い首筋や枕に乱れて広がっている。よく笑う猫みみたいな目もとは、今は潤んで、とろりと熱を帯びていた。昼間の、遠慮のない「幼なじみの成美」は、そこにいなかった。

味噌汁の具で言い合いをし、洗濯物の畳み方でからかい合う、あの威勢のいい彼女。会社の同僚に向ける、しっかり者の横顔。地元の友だちと笑い転げる、子どもの頃から変わらない顔。蓮は、成美のいろいろな表情を知っているつもりだった。十何年も隣で見てきたのだから。

けれど、この顔だけは違った。誰にも見せたことのない、声も、表情も。腕のなかでほどけていく彼女のすべてを、今、自分だけが受け止めている。その事実が、十年分の想いと混ざって、どうしようもなく蓮を昂ぶらせた。

「……れん」

呼ばれて、胸の奥が締めつけられる。

子どもの頃から数えきれないほど呼ばれてきた名前のはずなのに。今のその呼び方だけは、誰も知らない。俺だけが知っている。



——ここから先は製品版でお楽しみください——